

特集

専門医志向者がおさえるべき眼科の知識

序 論

根岸一乃*

眼科専門医制度は、質の高い眼科医療を担う人材を育成することを目的として整備されてきた。専門医を志す若手医師にとっては、日常診療の積み重ねのみならず、体系的かつ横断的な知識の習得が不可欠である。しかし近年、眼科医療は急速に高度化・細分化が進み、網膜、角膜、緑内障、屈折矯正、神経眼科など各分野の専門性はますます深化している。その一方で、専門分化が進むほど、基礎的事項を俯瞰的に理解し、診療の根幹を支える共通知識を確実に身につけておくことの重要性はむしろ高まっているといえる。

専門医試験を意識した学習はもちろん重要であるが、本質的に求められるのは、単なる知識の暗記ではなく、臨床現場で応用可能な理解である。たとえば、眼病理や眼腫瘍の基礎知識は、日常診療で遭遇する腫瘍性病変の適切な鑑別や生検適応の判断に直結する。また、眼光学の理解は、屈折矯正や眼内レンズ度数計算のみならず、視機能評価や調節、さらには近視進行抑制の理解にも不可欠である。弱視・斜視の知識は、小児期の視機能発達を守るうえで重要不可欠であり、早期介入のタイミングを誤らないための基盤となる。さらに、遺伝性疾患や統計学的手法に関する理解は、近年

のゲノム医療やエビデンスに基づく医療 (EBM) の実践において必須の素養である。

本特集では、「専門医志向者がおさえるべき眼科の知識」というテーマのもと、専門医としての土台を形成する領域に焦点を当てた。眼病理・眼腫瘍、眼光学、弱視・斜視、遺伝性疾患、統計という、一見すると分野横断的で幅広いテーマであるが、いずれも専門医として診療を行ううえで避けて通れない基礎領域である。各分野の第一線で活躍されている先生方に、それぞれの領域のエッセンスを、試験対策にとどまらない実践的視点からご解説いただいた。

若手医師にとっては、日々の多忙な診療のなかで、基礎を改めて体系的に整理する機会は決して多くない。本特集が、知識の抜けや曖昧さを再確認し、自らの理解を再構築する契機となれば幸いである。また、既に専門医資格を有する読者にとっても、基本事項を再確認することで、診療の質をより一層高める一助となることを期待したい。

専門医とは、単に資格を有する医師ではなく、確かな基盤のうえに専門性を積み重ね、患者に対して最適な医療を提供できる存在である。本特集が、その礎を強固にする一冊となることを願っている。

*Kazuno Negishi 慶應義塾大学医学部眼科学教室